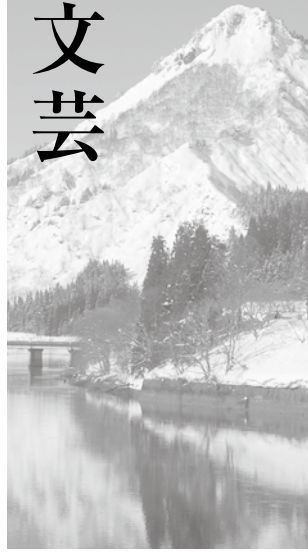


町民文芸



只見短歌会

一月詠草

大塚栄一 指導

若者の駅伝に沸く正月のテレビに年甲斐なく興奮す
馬場 八智

今の仕事軌道に乗りしか子の許に懇ろな歳暮幾つか届く
古川 英子

若き日の職場の友の死を悔み思ひ馳せつつ独り香焚く
吉津 政枝

施設より帰りて夫に香供へまた新年になりしと話す
五十嵐 英子

小正月の団子作るに粉出せば四人の孫は喜々として寄る
目黒 富子

豪雪の対策本部設置とふ降り継ぐ朝の放送は告ぐ
渡部 ゆき子

久々の孫の電話は下の子の未だなほらぬ中耳炎を言ふ
皆川 恒子

新聞を配るに独り居の友は玄関に靴を幾組も置く
五十嵐 夏美

先に逝きし夫を守りて行くならん心の支への歌詠みつぎて
齊藤 ちひろ

正月を避けて帰省の子と共に温泉にゆけば過ぎし日思ふ
渡部 ヨリ子

つね狭く感じてをりしわが家も独りの留守居は広くて寂し
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一 指導

日に三度雪片付けの喪正月
あと先も見えぬ雪道初句会
敦子

風よけの帽子目深に初句会
雪女来そうな夜よ飴煮つまる
礼

大雪や七草バック並ぶ店
談話室つられて笑う隙間風
邦男

春暁や運休告げる只見線
表札に母の名残る遠雪崩
恒夫

朝毎に箱尺沈む雪の嵩
風花や二十三区の子供たち
吉児

飴詰めや口すばませて吹雪く夜
曲り屋に二人だけなる鬼やらい
隆堂

東京の子等来てはしゃぐ春炬燵
屋根替えの誉めて見上ぐる天守閣
邦夫

揚げ物の出店の列に春の雪
飴よばれ外の寒さを言わずおく
笑羊

蕎麦捏ねる鉢にひび入り三代目
山里の家並みや初日やわらかに
リウコ

手と手と手顔と顔顔どんどの日
夜着の衿湿りし朝の静かさよ
洋子

石たたき足を速めて雪解水
「火の用心」貼って華やぐ春座敷
一穂

座を変えて思いを変えて春炬燵
予寒なお一人昼餉の干物焼く
康女

トタン屋根一塊の雪光りおり
雪解けの水の一筋夕路肩
修一